議　事　録

I　全体会議

日　時：平成5年2月15日（月）9：45～16：30
場　所：アルカデイア市ヶ谷
（東京都千代田区九段北4－2－25）
出席者：
厚生省母子衛生課主査　正林　督章
主任研究者　小川雄之亮
分担研究者　多田　裕、田中憲一、
中村　肇、前川喜平
研究協力者
（多田班）池ノ上克、末原則幸、中村　敬、
柴田　隆、小泉武宣、三科　潤
（田中班）田中忠夫、高橋克幸、小林俊文、
青木耕治、鳥居裕一、佐治文隆、
高橋恒男、藤村正哲
（中村班）竹峰久雄、竹内　豊、大野　勉、
李　容桂、小田良彦、中林正雄
（小川班）板橋家頭夫、磯辺健一、志村浩二、
山内芳忠、河野寿夫、近藤　乾、
後藤彰子、井村総一、江口秀史、
鈴木文晴
（前川班）川上　義、犬飼和久、庄司順一、
秦野悦子、山口規容子
（共同研究者）為近慎司、遠藤　紘、和田俊朗、
梶浦詳二、山中美智子、吉沢浩志
岡塚直人、香川秀之、友田昭二、
川滝之良、上谷良行、奥谷貴弘
永山善久、喜田善和、新宅治夫
安藤一人、出良　弘、田中理砂
金子広司、近藤昌敏、白井眞美
仁志田博司、西田　朗、岩城清子、
河野親彦、岩瀬一弘、
議　事：
(1) 開会挨拶
主任研究者　小川　雄之亮
(2) 挨　拶
厚生省母子衛生課主査　正林　督章
(3) 平成4年度分担研究報告
1. 地域周産期医療システムの評価に関する研究班
分担研究者　多田　裕
2. ハイリスク児の予防に関する研究班
分担研究者　田中　憲一
3. ハイリスク児の調査に関する研究班
分担研究者　中村　肇
4 ハイリスク児の管理に関する研究班
分担研究者　小川雄之亮
5. ハイリスク児の地域ケアのあり方に関する研究班
分担研究者　前川　喜平
(4) 全体討議（ハイリスク児の搬送と費用負担）
話題提供：小田　良彦
西田　朗

分担研究
「地域周産期医療システムの評価に関する研究」

多田班議事録
1）第1回
日　時：平成4年9月3日（木）
12：00～16：30
場　所：きゅりあん（品川区総合区民会館）
第3講習室（5階）
東京都品川区東大井5－18－1
(03) 5479－4100
出席者：
分担研究者　多田　裕
厚生省母子衛生課　渡辺真俊
主任研究者　小川雄之亮
研究協力者
本多　洋、池ノ上克、末原則幸、
中村　敬、柴田　隆、千葉　力、
小泉武宣、三科　潤、宇賀直樹、

中村　肇
他の分担研究者
中江陽一郎、吉沢浩志
事　務　局　　飯島由里子
議　題：
1）挨拶（厚生省、主任研究者）
2）研究の進め方に関する検討
3）本年度の研究班の予定
4）事務連絡

2）第2回
日　時：平成4年11月4日（水）
12：00～16：00
場　所：きゅりあん（品川区総合区民会館）
第1回講習室（5階）
東京都品川区東大井5－18－1
(03) 5479－4100
出席者：
分担研究者　　多田　　裕
主任研究者　　小川雄之亮
研究協力者
本多　洋、池ノ上克、小柳孝司、
末原則幸、中村　敬、柴田　隆、
千葉　力、小泉武宣、三科　潤、
宇賀直樹、中江陽一郎
他の分担研究者
田中憲一、中村　肇
議　題：
1）研究中間発表
2）リサーチクエスチョンに関する検討
3）フォーラムの企画に関する検討

3）第3回
日　時：平成5年2月1日（月）
10：00～14：00
場　所：きゅりあん（品川区総合区民会館）
小会議室（6階）
東京都品川区東大井5－18－1
(03) 5479－4100
出席者：
分担研究者　　多田　裕
厚生省母子衛生課　上家　和子
研究協力者
本多　洋、池ノ上克、末原則幸、
中村　敬、柴田　隆、千葉　力、
小泉武宣、三科　潤、宇賀直樹、
池田智明
議　題：
1）研究発表
2）来年度の研究打ち合わせ
3）フォーラム準備検討
4）事務連絡

フォーラム「これからの周産期医療を考える」
日　時：平成5年2月1日（月）
14：00～17：30
場　所：きゅりあん（品川区総合区民会館）
大会議室（6階）
東京都品川区東大井5－18－1
(03) 5479－4100
出席者：
主任研究者　　小川雄之亮
分担研究者　　多田　裕、田中憲一、
中村　肇、前川喜平
厚生省母子衛生課　上家和子　正林督章
研究協力者
本多　洋、池ノ上克、末原則幸、
中村　敬、柴田　隆、千葉　力、
小泉武宣、三科　潤、宇賀直樹、
池田智明、上谷、奥谷貴弘、
板橋家頭夫、加古結子、磯辺健一
山内芳忠、河野寿夫、後藤彰子
鈴木文晴、橋本武夫、出良、竹内　豊、
喜田、大野　勉、鳥山義仁、名越　兼、
鬼本博文、季　容桂、小田良彦、永山、
天野、野田、久木田穣次、石塚祐吾、
内田　章、中野仁雄、仁志田博司、
樋口正俊、友田、中林正雄、安藤一人、
田中忠夫、名取直美、常角早苗、
遠藤直美、福士文美、水上清美、
菅沼明美、堤　紀夫、秋山　洋、
小林俊文、岡井　崇、馬場一憲、

木戸浩一郎、高橋恒男、山中美智子、
藤村正哲、犬飼和久、中江陽一郎、
奥山和男、竹峰久雄、坂元正一、
戸苅　創、竹村　喬、武田佳彦、
大崎逸郎、渡辺とよ子、宇津正二、
中嶋健之、小柳孝司、篠塚憲男
以上78名

プログラム

「これからの周産期医療を考える」

日　時：平成5年2月1日（月）
14：00～17：00

場　所：きゅりあん（品川区総合区民会館）
大会議室（6階）
東京都品川区東大井5－18－1
(03) 5479－4100

提供者：

1. 10年後の産科医療を考える

1) 予想される今後の産科医療
九州大学周産母子センター
小　柳　孝　司

2) 産科医の年齢構成からみた今後の予測される産科医療体制
樋口産婦人科医院
樋　口　正　俊
三井記念病院産婦人科
本　多　　洋

3) 母子統計からみた産科医療の変化
東京都母子保健サービスセンター
中　村　　敬

2. 母子医療の経費を社会がどう負担するか
東京女子医科大学産婦人科
武　田　佳　彦

3. 地域医療としての周産期医療の将来

1) 産科施設併設による小児病院NICUの変化
神奈川県立こども病院新生児科
遠　藤　彰　子

分担研究

「ハイリスク児の予防に関する研究」

田中班議事録

1) 第1回

日　時：平成4年10月7日（水）
12：00～16：00

場　所：スクワール麹町

出席者：
田中憲一、正林督章、小川雄之亮、
中村　肇、多田　裕、前川喜平、
高橋恒夫、鳥居裕一、宇津正二、
佐治文隆、木村　正、青木耕治、
梶浦詳二、香川秀之、佐藤孝道、
為近慎司、山中美智子、藤村正哲、
高橋克幸、遠藤紘、田中忠夫、
小林俊文、名取道也、岡井崇、
吉沢浩志、高桑好一、関塚直人
計27名

議　事：

(1) 研究を遂行するためのプロトコール作成等についてフリートーキングでの討論が求められ、研究協力者それぞれが自己紹介と挨拶をし、討議にはいった。

(2) ハイリスク児として早産児、IUGR児、仮死児などが挙げられ、不妊症治療後の妊娠、経済状況、高齢妊娠などのハイリスク妊娠に関連する事項の問題提起がされた。これらの異常例の背景因子について1990、1991年の2年間の調査をすることにした。

(3) 各施設のScreening Systemについて実態調査を行うことにした。

(4) 習慣流産の研究については4施設で取り組むことにした。

2) 第2回

日　時：平成4年12月14日（月）
14：00～17：00

場　所：アルカディア市ヶ谷

出席者：
田中憲一、正林督章、小川雄之亮、

高橋恒夫、鳥居裕一、佐治文隆、
木村　正、青木耕治、梶浦詳二、
香川秀之、佐藤孝道、為近慎司、
山中美智子、藤村正哲、高橋克幸、
遠藤　紘、田中忠夫、小林俊文、
石本人工、岡井　崇、吉沢浩志、
関塚直人、石井史郎、安田雅子
計24名

議　事：

(1) 第1回調査により各施設の早産数・率、周産期管理の実態、習慣流産治療などの集計報告があった。国立仙台病院の調査も報告があり、職業、住宅環境、通勤圏などの問題点が指摘された。

(2) 第2回調査について調査票案が説明され、検討の結果、調査対象を低出生体重児とすること、対象児の前の正常分娩例を正常コントロール例とすること、多胎例も調査に含むが、統計処理上は分けて検討することが合意された。

(3) 今後の研究課題について討議し、リン脂質抗体、超音波検査、前期破水治療の有効性などのProspective Studyが提案され、引き続いて検討する事にした。

中村班議事録

1) 第1回

日　時：平成4年9月24日（木）
14：00〜18：00

場　所：ホテル国際観光3階宴会場

出席者：中村　肇、小川雄之亮、多田　裕、友田昭二（萩田代理）、大野　勉、季　容桂、竹内　豊、小田良彦、中林正雄、増本　義、出良　弘（橋本代理）、西島正博、吉沢浩志、田中宏一、上谷良行、奥谷貴弘、正林督章（厚生省）

1. 小川主任研究者より、本研究班の概略と事務処理について説明があった。
   - 5つの分担研究班に分かれているが、互いに連携をとって研究を進めて頂きたい。
   - 分担研究者は、他の班会議にも出席し意見を交換する。研究協力者も他の班会議に出席してもらえれば有り難い。
   - 研究協力者には100万円ずつの予算となる。12月頃に支払われると思うので、それまでに預金通帳を作成して頂きたい。尚、それまでの支出は「立て替え払い」とし、旅費は出張曜日で異なるので注意してください。
2. 厚生省正林督章主査より本研究班の主旨について説明があった。
   - 厚生省班研究には基礎研究、臨床研究、行政研究があるが、本研究班は行政研究であり、行政施策につなげるものであって欲しい。
   - 班構成メンバーは、小児科、産科をはじめいろいろなフィールドの研究者の混成にしてあるので、有機的な連携のもとに研究を進めて頂きたい。
   - 研究を進める上で、Informed consentは必ずとって頂きたい。
3. 中村班長より、本研究班での研究課題、研究目的についての説明があった。
   - 研究目的は、「ハイリスク児の発生率の低下、後障害発生率の低下を目指す方略検討のための基礎データベースの作成」である。
   - 3年間の研究であり、本年度は研究者の施設データを提出し、次年度以後の全国調査のための基準資料づくりを行う。
4. 各班研究者より班研究の課題、進め方について意見が出された。
5. 検討事項のまとめと今後の計画
   A. 各施設でのハイリスク児収容の実態を調査研究する。
   →1991年度出生のハイリスク児を対象に疾患別の患者数、予後を調査する。
   B. 仮死出生児の発生原因調査はProspective studyとする必要がある。
   →次回班会議までに、中村班員が中心となり仮死発生原因解明のためのプロトコールを作成する。

C. ハイリスク児の調査には児の予後まで含めた縦断的な調査研究が必要である。
→次回班会議までに、竹内班員が中心となり超未熟児、仮死児用の統一的な「フォローアップのチェック項目」、「後障害の定義」の原案を作成する。

D. 地域における調査研究など本研究の主旨に沿った個別研究を進める。

6. 次回の班会議

日　時：11月4日
10：00〜12：30

場　所：大井町きゅりあん　第一講習室

なお、当日午後には多田班の班会議が引き続き同じところで行われますのでできれば参加してください。

事務担当：上谷良行
tel. 078－341－7451
fax.078－371－6239

2) 第2回

日　時：平成4年11月4日（水）
10：00〜14：30

場　所：きゅりあん5階第一講習室

出席者：中村　肇、橋本武夫（出良　弘）、季　容桂、増本　義、竹内　豊（喜田善和）、小田良彦（永山善久）、大野　勉、中林正雄（安藤一人）、会田道夫（竹峰代理）、友田昭二（荻田代理）、野田芳人・前田宗徳（西島代理）、事務局（上谷良行、奥谷貴弘）、小川雄之亮、多田　裕、吉沢浩志、石井史郎（田中代理）、末原則幸、千葉　力、三科　潤、小泉武宣、宇賀直樹

1. 1991度出生のハイリスク児の実態－協力施設における患者数の中間集計について事務局より報告があった。
・全ハイリスク児4624例、超未熟児261例、仮死児164例について分析した。
・調査は1991年1月1日〜12月31日出生の小児科入院のハイリスク新生児を対象とする事を確認した。
・記載もれがあり、もう一度返送するので再度記入をお願いしたい。

2. 中村班員より仮死発生原因解明のためのプロトコール（新生児仮死調査票）について説明があった。
・対象を成熟児の仮死とするのか、奇形・胎児水腫等も含めたものにするのか討論があった。
・仮死の原因が先天性であるか否かを判別することが重要である。
→在胎37週以上の新生児仮死例とする。
院内出生を中心とする。産科情報が十分にそろう施設からの院外出生も含める。

3. 竹内班員よりハイリスク児調査における「フォローアップのチェック項目」とその進め方について説明があった。
・超未熟児の予後調査の方法を統一化するための試案である。
・超未熟児の調査票のフォームを作成した。
・超未熟児の出生に至った過程を時系列でフリーに記載できる様式とする（サンプルを竹内班員が作成する）。
・評価する時期は1歳までは修正月齢で、1歳以降は暦年齢で行う。

4. 今後の計画
・ハイリスク児実態調査をもう一度記入し直し、次年度以降の全国調査の基礎データとする。
→今年度の報告書に記載する。
・新生児仮死調査票を11月中に完成し、班員に配布し、1991年度出生の児から記載する。
・超未熟児調査票、発達調査票を完成し、班員に配布し、1991年度出生の児から記載する。

5. 次回の班会議

日　時：平成5年2月1日（月）
10：00〜12：30
14：00より多田班と合同のフォーラム開催の予定

場　所：大井町きゅりあん

事務担当：上谷良行
tel.078－341－7451
fax.078－371－6239

3) 第3回

日　時：平成5年2月1日（月）
10：00～13：30

場　所：きゅりあん6階中会議室

出席者：中村　肇、橋本武夫（出良弘）、季　容桂、竹内　豊（喜田善和）、小田良彦（永山善久）、大野　勉、中林正雄（安藤一人）、竹峰久雄、友田昭二・新宅治夫（荻田代理）、西島正博・野田芳人・天野完、事務局（上谷良行、奥谷貴弘）小川雄之亮、田中憲一、石塚祐吾、正林督章（厚生省）

1. 厚生省正林主査より本研究班の意義について再度説明があった。
   - 母子保健施策を実施したときに評価基準となるback　dataが行政として必要であるとの観点からも調査を進めて欲しい。
2. 中村班長より、本研究班の研究目的は、「ハイリスク児の発症原因を純医学的な問題、経済福祉の問題、家庭環境の問題等より総合的検討を加え、予防し得る要因と予防し難い要因を明確にしその発生率を低下させるための戦略を立案することにある。
   今年度は、異常児発生頻度の高い超未熟児、仮死児を取り上げ、班員の所属する施設での調査から、次年度以降の全国ベースでの調査を進めていく上での問題を明らかにすることであり、その基礎調査に多大な御協力を頂いたことに感謝する。
3. 1991年度出生のハイリスク児の実態－協力施設における患者数の全体集計について事務局より報告があった。
   - 全ハイリスク児4827例、後障害・要医療生存児152例、超未熟児252例、仮死児178例について分析した。
   - 超未熟児の予後は正常発達42％、新生児死亡38％、後障害8％である。
   - 院内出生の仮死児の予後不良例は1例のみあるが、院外出生では17例が予後不良で、胎児モニター実施の有無によってもその頻度に差がなく、その背景の分析が必要である。
   - 今後の調査では予後を正確に把握しなければ、正しく周産期医療を評価できない。
4. 中林班員より仮死発生要因調査（新生児仮死調査票）について集計結果報告があった。
   - booked　patientでも3～5％の仮死は発生する。
   - 東京女子医大4年間の仮死37症例の検討の結果、死亡は1例（18trisomy）、後障害2例（早剥1例、原因不明1例）であった。
   - 班員施設集計49症例では、死亡3例、後障害6例であり、CTG上胎児仮死無しと診断されていたものが11例あり、これらの児での仮死発生の要因としては早剥、骨盤位、破水後長時間経過が関与していた。
5. 友田班員より仮死の発生要因として産科医の管理レベル、患者自身のPoor　antenatal care、保険医療制度上の問題等から検討すべきとの報告があった。
6. 竹内班員より超未熟児調査について集計結果報告があった。
   - 超未熟児251例中、生存退院157例、新生児死亡78例で、新生児死亡率は前回の竹峰班での集計結果より高かった。
   - 生命予後は母体搬送例で最も悪く、次いで院外出生、院内出生の順であった。
   - 母体搬送例で羊水混濁、羊水過少、母体発熱が多く、敗血症の合併頻度が高かったが、明らかな原因は不明であった。
   - 今後の方向として、予後調査票を用いたためProspectiveな研究としたい。
   - 行政サイドで新生児出生、死亡数の体重別、地域別の集計を出すことが、調査を進める上に必要である。
   - 「超未熟児医療が救命からintact　survivalを目指す」との視点から、母体搬送の適応と

していない部分もあったのではないかとの意見が出された。

7. 大野班員より、超未熟児の家庭背景などソフトな部分をもっと知る必要があるとの指摘があった。

8. 小田班員より病院連携の問題、院外仮死児のデータ収集の困難性について報告があった。

・超未熟児の社会的背景を知るにはカルテのみではこれまでのデータ不足のためprospective studyでなければ不可能である。

9. 季班員より大阪の新生児医療システムから見たハイリスク児のケアーについて報告があった。

・超未熟児の80％、極小未熟児の60～70％がシステムで収容されている。

・大阪府では新生児死亡の全体像の把握のため、新生児死亡登録事業を稼動させる予定である。

10. 竹峰班員より今回の調査を通じて今後の課題として問題点について指摘があった。

・医療外の問題をもっと取り上げ、新しいパラメータを作成すべきとの意見が出されました。

11. 橋本班員より聖マリア病院における超未熟児医療を通じて、

・極小未熟児入院数は増加傾向にあり、母体搬送により死亡率は改善している。

・長期入院例の増加によりベッド占有が大きな問題であるとの指摘がなされた。

12. 総合討論

・本研究班の目的は、ハイリスク児の発生予防と障害発生児に対してはその支援を如何に行うか検討するための情報を提供することにある。

全国調査を実施するに当たって重要なことは、調査される患者へのフィードバックと調査に協力した人へのバックアップ（経済的etc）を考慮する必要がある。

・新生児死亡率は医療サイドだけでなく、行政レベルで行えるのではないか。

→ICD10に変更されると、死亡届の書式が変わり、1歳未満の死亡には出生体重と在胎週数が記載されるので新生児死亡調査は簡単に行なえる。

・次年度からの調査の進め方

・超未熟児発生調査票を作成し、今後入院してくる症例を対象に家庭環境などを含めたprospectiveな調査を継続して行う。

・今年度の調査結果から、仮死の発生原因に関する純医学的調査を全国レベルで行うのは困難である。発症原因調査はbooked patientを対象に班員施設で詳細に検討する方が効果的である。

・仮死児の発生状況を把握するには、簡単な調査票で行うのが良い。

・1990年の石塚による超未熟児全国調査に継続した全国調査として位置づけ、今後は死亡だけでなく予後をも含めたものとする。

・小川班全体として調査に協力してもらえればほぼ全国レベルに近い調査が可能である。

・行政レベルの調査として実施するには、調査による行政上のメリットが何かを明確にしないと取り上げられないだろう。また、研究班内で出来ない理由を明らかにする必要がある。

<u>報告書作成上の注意</u>

・400字づめ4枚で刷り上がり1頁として研究協力者1人2頁とする。従って図表無しで400字づめ8枚程度

・正しい英文の所属を記載すること。

・一太郎で入力したディスクを提出することが望ましい。

<u>会計報告、研究報告書の提出</u>

事務処理の際、年末に配布した会計書類の見本を良く見て間違いのないよう注意して欲しい。会計報告、研究報告書提出の締め切りは2月20日

次回の班会議（小川班総会）

日　時：平成5年2月15日（月）
10：00～16：30

場　所：アルカディア市ヶ谷

事務担当：上谷良行　tel.078－341－7451
fax.078－371－6239

分担研究
「ハイリスク児の管理に関する研究」

小川班議事録

1）第1回

日　時：平成4年9月28日（月）
14：00～17：00

場　所：川越東武ホテル

出席者：山内芳忠、板橋家頭夫、竹内俊雄、後藤彰子、河野寿夫、近藤　乾、鈴木文晴、磯部健一、吉沢浩志、志村浩二、井村総一、中村　肇、多田　裕、江口秀史、小川雄之亮、正林督章

議　事：(1) 分担研究者（主任研究者）挨拶
(2) 厚生省係官挨拶
(3) 班員紹介
(4) 本年度の研究概要について分担研究者から説明があった。
(5) 本年度の各個研究について研究計画を討議した。

2）第2回

日　時：平成5年2月6日（土）
13：30～17：00

場　所：アルカディア市ヶ谷

出席者：後藤彰子、川滝元良、磯部健一、河野寿夫、山内芳忠、吉沢浩志、林　智靖、板橋家頭夫、井村総一、白井眞美、志村浩二、近藤　乾、鈴子文晴、江口秀史、小川雄之亮

議　事：(1) 主任研究者挨拶
(2) 各個研究者の研究成果を発表した。
(3) 来年度の研究内容についての計画を討議した。

分担研究
「ハイリスク児の地域ケアのあり方に関する研究」

前川班議事録

1）極小未熟児の発達を考える会（仮称）

日　時：平成4年7月3日（金）
16：00～18：00

場　所：慈恵医大第一会議室

出席者：多田　裕、山口規容子、仁志田博司、廿楽重信、落合幸勝、副田敦裕、横井茂夫、奈良隆寛、中江陽一郎、松島宏、前川喜平

議　事：

（目的）新生児グループと小児神経グループとその他のグループが協力して極小未熟児の発達チェックと療育、育児ならびに家庭支援をおこなう協力システムの基礎を作る。

（現状）新生児医、小児神経医、心理、保健婦など、いろいろなグループが関係しているが、ひとつだけでは上記の目的を達成することは出来ない。

1. 極小未熟児の発達チェックにはどのようなグループが必要か？
2. 役割分担と協力体制はどうするのか？
3. 一定の検査法の確立はどうするか？
4. 　その他

2）ワーキンググループ－極小未熟児発達勉強会

日　時：平成4年8月20日（木）
18：00～21：00

場　所：慈恵医大高木会館

出席者：多田　裕、山口規容子、川上　義、仁志田博司、犬飼和久、斉藤久子、松石豊次郎、諸岡啓一、落合幸勝、廿楽重信、奈良隆寛、大野　勉、庄司順一、宮尾益知、中江陽一郎、副田敦裕、秦野悦子、松島　宏、前川喜平

議　事：

1. 篁倫子先生、浪江先生、斉藤久子先生よ

り極小未熟児の就学時の発達チェックについて発表があった。

2. 発表内容をもとに就学時の極小未熟児の発達チェックについて以下の討論があった。

(1) 本研究は極小未熟児の全体の発達をみるのか、障害児を発見するためにおこなわれるのかについては就学時の発達全体をみる。

(2) 知能テストについてはWISC－RかWIPPSIを使用するが、その他2～3の諸検査が必要である。

(3) 知能テスト以外に小児神経学的soft neurological signも重要である。

(4) 家庭の背景をみることも必要である。

(5) 言語としてITPAが使えそうである。

(6) 新生児期を知らない小児科医が診察することは良いことである。

(7) IQが正常（境界ではない）で学習障害があるこどもをどうするかが問題である。

(8) 未熟児発達チェックと支援のためのチームワークづくりのひとつのモデルを作成する。

(9) 手技、考えを統一するための講習会をおこなう。

(10) 前川グループに山口規容子先生（女子医大）をいれる。

3. 次回会議までに次のテーマについて担当者が（案）をまとめる。

(1) 心理テスト（知能テストなど）　庄司　順一

(2) 小児神経学的診察法　諸岡　啓一

(3) 家庭の背景　山口規容子

(4) プロトコール（新生児期）　川上　義

(5) 診断書名　松石豊次郎

4. 本研究をおこなう上での留意事項

(1) 本研究は極小未熟児の発達のみをみるのではなく、この結果を新生児医療にfeed backするようにする。

(2) 障害を早期に発見し、interventionすれば良くなる方法を絶えず考える。

(3) インフォームド　コンセントにくれぐれも気をつける。

3) 第1回

日　時：平成4年9月25日（金）
14：00～18：00

場　所：慈恵医大高木会館5階A会議室

出席者：山口規容子、諸岡啓一、落合幸勝、川上　義、犬飼和久、松石豊次郎、庄司順一、宮尾益知、秦野悦子、奈良隆寛、中江陽一郎、横井茂夫、副田敦裕、松島　宏、前川喜平

議　事：

1. 第2回ワーキンググループ会議（8月25日）議事録の確認。

2. 極小未熟児の就学時の心理テストとしては次のものをおこなう。
知能検査：WPPSI または WISC－R
視覚認知、視覚－運動系の心理検査
a BGT（ベンダーゲシタルトテスト）またはDTVP（フロスティッグ視知覚発達検査）
b DAM（グッドイナフ人物画知能検査）

3. 言語テストとしてはITPAを併用する。

4. 小児神経学的診察法に関し、諸岡氏の原案について検討がおこなわれた。

5. 診断名についてはDSMⅢ－R、バンクーバースタディーをもとにした松石氏の原案について検討がおこなわれた。

6. 新生児期のプロトコールに関し、川上氏作成の原案について検討がおこなわれた。

7. 次回班会議予定
平成4年11月7日（土）午後2時より慈恵医大にておこなう。
10月20日迄に以下の分担についてのまとめを提出する。
・診断名（松石）
・小児神経学的診察法（諸岡）

・プロトコール（川上）
・心理テスト（庄司）
・家庭的背景（山口）

8. 11月7日の班会議に（案）を検討し、そのプロトコールに従って極小未熟児の就学時のチェックをおこなう。
なお、発達をチェックすると共に絶えずその結果をフィードバックすることを心がけておこなう。

4) 第2回

日　時：平成4年11月7日（土）
14：00〜18：00

場　所：慈恵医大高木会館5階D1会議室

出席者：山口規容子、諸岡啓一、落合幸勝、川上　義、犬飼和久、松石豊次郎、庄司順一、宮尾益知、秦野悦子、奈良隆寛、中江陽一郎、横井茂夫、副田敦裕、松島　宏、前川喜平

議　事：

1. 極小未熟児の就学前検査法について

1) 心理テスト
年齢は暦年齢6才〜とする。
知能テストはWPPSI、WISC－Rのどちらかを必ずおこなう。その他、必要に応じてBGT、DTVP、DAMをおこなう。

2) 言語テスト
秦野班員よりテスト場面のVTR記録、認知型のテスト（案）などが出されたが、これは全員に施行することは無理なので出来る機関でおこなうこととした。

3) 家庭的背景
山口班員の調査用紙の「収入の項目」については、800〜1000万を加えることで原案通り。

4) 小児神経学的診察
A、行動、反応
2、代替質問を「父母の名前は？」に変更。
D－18、利き手
「積み木をつむ、物を投げる、字をかく、ハシを使う」とする。
E、神経心理学的検査の項は出来る機関はおこなう。

2. 本年度研究

1) 各機関が従来おこなっていた極小未熟児の就学前のデータをまとめる。
2) 今回決定したバッテリーを使用して出来るだけ、at randamに就学前のテストをおこなってみる。
3) 検査をする時に絶えず新生児医療、小児にfeed backすることを心がけておこなう。

3. 次回班会議予定
平成5年2月12日（金）午後2時より慈恵医大にておこなう。

5) 第3回

日　時：平成5年2月12日（金）
14：00〜18：00

場　所：日赤会館

出席者：山口規容子、諸岡啓一、落合幸勝、川上　義、犬飼和久、松石豊次郎、庄司順一、宮尾益知、秦野悦子、奈良隆寛、中江陽一郎、横井茂夫、副田敦裕、松島　宏、前川喜平

議　事：

1. 極小未熟児の就学前の発達について
ワーキンググループが作成し、2回の班会議の結果、11月7日（土）に作成した就学前発達チェックのプロトコールに従って聖隷浜松、自治医大、東京女子医大周産期センター、日赤、慈恵、東邦など39症例についての結果が報告された。
神経学的診察では、Axis Ⅰ、運動で微細運動障害が多い、知能テストではIQ85以上であるが100以下のものが多いこと、VIQとPIQに差のあるものが多いことが注目された。
神経学的診察では、質問項目に自転車に乗れる、ブランコの立ちこぎ、ジャン

グルジムで上の方の登れるなどの項目が、テストでは片足立ち、継ぎ足の判定、片足ケンケン、スキップ、三角、四角、丸を真似して描く、左右の判別などを加えたらという意見と質問例「おじぎをする」は解からないが「礼」と言うと解るなどの意見があった。その他、北療、埼玉、母子保健院などよりの報告があった。

2. Early　Interventionについて

庄司のearlu　interventionについての文献的考察のまとめ、前川のearly intervationの施行案、諸岡より大田区に於ける障害児療育グループの説明などをもとにして、極小未熟児のearly intervationの実施について討議が行われた。そして平成5年度は2歳より各地区で行うこととした。

3. 平成5年度予定

1) 極小未熟児の就学前の発達状態のチェック
本年度の研究を継続して行う

2) 2歳、3歳児における発達チェックのプロトコールの作成

3) early　interventionを行う
次回班会議　平成5年4月16日（金）に行う